

氏物語評釈

第四卷

絵合 松風 薄雲
朝顔 乙女

玉上琢彌

角川書店

源氏物語評釈 第四卷
全十一卷



昭和四十年九月三十日 初版発行
昭和四十三年一月三十日 再版発行

定価 二〇〇〇円

著者 玉上 琢彌 (たまがみ たくや)

発行者 角川 源義 (かくがわ げんぎ)

印刷者 中村 政二 (なかむら まさふみ)

製本者 鈴木 俊一 (すずき しゅんいち)

発行所 株式会社 角川書店 (かくがわ しょうてん)

東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座 東京 一九五二〇八番
電話九段 (265) 七二二 (代表)

© T. Tamagami 1965

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替え致します

信教印刷・鈴木製本

目次

凡例

絵合

一	前齋宮入内、朱雀院の贈り物	一九
	前齋宮の御参りの事、中宮の御心に入れてもよほしきこえたまふ	
二	源氏参内、御息所を回想	二四
	院の御有様は、女にて見たてまつらまほしきを	
三	主上、弘徽殿に親しむ	二七
	中宮もうちにぞおはしましける、上は、めづらしき人参りたまふと	
四	当時の後宮	二九
	院には、かの櫛の箱の御返り御覽せしにつけても	
五	主上、絵を好む。後宮も競争する	三二
	ふたところの御おぼえども、とり／＼に、いどみたまへり	
六	物語絵合せ、竹取と宇津保	三六
	中宮も参らせたまへる頃に、かた／＼御覽じつゝ	
七	伊勢と正三位	四三
	次に伊勢物語に、正三位を合はせて、また定めやらす	
八	御前の絵合せ	四四
	おと／＼参りたまひて、かくとりどりに争ひ騒ぐ心ばへども	

九 源氏の日記絵で勝つ

その日と定めて、にはかなるやうなれど、をかきさまに

十 源氏と帥の宮と絵画論

夜明け方近くなる程に、ものいとおはれにおぼされて

十一 御前の合奏

廿日あまりの月さし出でて、こなたはまださやかならねど

十二 源氏の反省

その頃の事には、この絵の定めをしたまふ

松 風

一 東の院、落成

東の院造りたてて、花散里と聞えし、うつろはしたまふ

二 明石入道、大井の邸を改築

明石には御消息絶えず、今はなほのほりぬべきことを宣たまへど

菟裘賦 井に序

三 源氏、大井の邸に手入れ

かやうに思ひ寄るらむとも知りたまはで

四 明石の御方、上京

親しき人々、いみじう忍びて下し遣す、

五 入道父子の訣別

秋の頃ほひなれば、もののあはれ取り重ねたるこゝちして

六 入道の別れの言葉

世の中を捨てはじめしに、かゝる人の國に思ひ下りはべりしことも

七 明石の御方母子、舟出

御事はあまた続けむも所せく、かたへつつ分けむもわづらはしとて

九

十

十一

十二

一

二

三

四

五

六

七

八

八 御方母子、大井に入る

思ふかたの風にて、限りける日たがへず入りたまひぬ

九 源氏、紫の上に諒解を求める

かやうにものはかなくて明かし暮らすに、おとどなか／＼しづ心なく

十 源氏、明石の御方を訪う

しのびやかに、御前うときはませで、御心づかひして渡りたまひぬ

十一 源氏、尼君と和歌を唱和

つくろふべき所、所の預り、いま加へたる家司などに仰せらる

十二 源氏、嵯峨の御堂に行く

御寺に渡りたまうて、月ごとの十四五日つごもりの日

十三 琴を弾いて御方と語る

ありし夜のことと思し出でらるゝ折り過ぎさすかの琴の

十四 源氏、大井を出発

またの日は京へ帰らせたまふべければ

十五 桂殿で遊宴

いとよそほしくさし歩みたまふ程、かしがましう追ひ払ひて

十六 二条の院に帰り、大井に消息

殿におはして、とばかりうち休みたまふ、山里の御物語

十七 紫の上に相談

その夜は内にもさぶらひたまふべけれど

十八 明石の御方の思い

いかにせまし、迎へやせまし、と思し乱る

六四

六六

一〇〇

一〇三

一〇六

一一〇

一二三

一二九

一三〇

一二二

一三四

薄雲

- 一 明石の姫君、紫の上の養女になる
冬になりゆくまゝに、川つらの住まひいと心ほそさ増さりにて
- 二 明石の御方の迷いと決心
げに、いにしへは、いかばかりの事に定まりたまふべきにか
- 三 明石の御方と乳母
めのとをもひき別れなむこと、明け事れの物思はしさ
- 四 明石母子の別れ
この雪すこしとけて渡りたまへり、例は待ちきこゆるに
- 五 二条の院の明石の姫君
道すがら、とまりつる人の心苦しさを、いかに罪や得らむと思す
- 六 花散里の近況
年も返りぬ、うらゝかななる空に、思ふ事なき御ありさまは
- 七 大井に行く源氏を見送る紫の上
山里のつれづれをも絶えず思しやれば
- 八 明石の御方と源氏
かしこには、いとのだやかに、心ばせあるけはひに住みなして
- 九 太政大臣、薨去
その頃おほきおとどうせたまひぬ
- 十 天変地異
その年おほかた世のなか騒がしくて
- 十一 藤壺の宮、崩御
入道後の宮、春の初めよりなやみわたらせたまひて
- 十二 夜居の僧都の密奏
御わざなども過ぎて、事どもしづまりて

一元

二四

一四

二五

一六

一五

一六

一四

一七

一八

一三

一九

十三 式部卿の宮薨去、帝と源氏

上は、夢のやうに、いみじき事を聞かせたまひて

十四 帝の御学問

上は、王命婦にくはしきことは間はまほしう思しめせど

十五 帝讓位の意、源氏固辞する

秋の司召に、太政大臣になりたまふべきこと

十六 齋宮の女御の里下がり

齋宮の女御は、思しもしるき御うしろ見にて

十七 春秋優劣論

はかしくしかたの望みはさるものにて

十八 源氏の反省

対に渡りたまひて、とみにも入りたまはず、いたうながめて

十九 紫の上、春をとる

女御は秋のあはれを知り顔に答へきこえてけるも

二十 大井に明石の御方を訪う

山里の人も、いかに、など絶えず思しやれど

朝顔

一 源氏、桃園の宮を訪う

斎院は、御服にており居たまひにきかし

二 女五の宮と昔話

宮対面したまひて、御物語り聞えたまふ

三 朝顔と対面

あなたの御前を見やりたまへば

四 朝顔と贈答

心やましくて立ち出でたまひぬるは

二〇七

二三

二三四

二二九

二三九

二三四

二三六

二二六

二四五

二四八

二五三

二五九

五 兩人の心情

東の對に離れおはして、宣旨を迎へつゝ語らひたまふ

六 紫の上の疑惑

世の中に漏り聞えて、前齋院、ねんごろに聞えたまへばなむ

七 源氏、紫の上と語る

夕つ方、神事などもとまりてさう／＼しきに

八 桃園の宮の荒廃

宮には、北面の人繁き方なる御門は、入りたまはむも

九 尼になつた源典侍

宮の御方に、例の御物語り聞えたまふに

十 源氏、朝顔を口説く

西面には御格子まゐりたれど、いとひ聞え顔ならむも如何とて

十一 朝顔の心動かず

言ふかひなくて、いとまめやかに怨じきこえて出でたまふも

十二 紫の上の嫉妬

大臣は、あながちに思し焦らるゝにしもあらねど

十三 二条の院の雪と月

雪のいたう降りつもりたる上に、今も散りつゝ

十四 紫の上と婦人評を交わす

一年、中宮の御前に雪の山つくられたりし

十五 紫の上と和歌を唱和

月いよく澄みて、静かに面白し

十六 藤壺を夢に見る

入りたまひても、宮の御事を思ひつゝ大殿籠れるに

十七 藤壺のために供養

なか／＼あかず悲しと思すに、とく起きたまひて

二六四

二六五

二六六

二六七

二六八

二六九

二七〇

二七一

二七二

二七三

二七四

二七五

二七六

乙 女

- 一 御禊の日、朝顔と贈答
年かはりて、宮の御はても過ぎぬれば、世の中色あらたまりて
三三
- 二 五の宮、朝顔に源氏との結婚をすすめる
女五の宮の御方にも、かように折すぐさず聞えたまへば
三六
- 三 夕霧の元服
大殿腹の若君の、御元服のことおぼしいそぐを
三〇
- 四 源氏の教育法
四位になしてむとおぼし、世人も、さぞあらむと思へるを
三三
- 五 字つくる式
あざなつくることは、東の院にてしたまふ
三六
- 六 作詩の会
事果ててまかつる博士、才人ども召して
三四
- 七 夕霧の勉強
うちつゞき、入学といふ事せさせたまひて
三六
- 八 夕霧の寮試子行
今は寮試うけさせむとて、まづわがお前にてころみ
三六
- 九 夕霧の寮試
大学に参りたまふ日は、寮門に、上達部の御車ども
三四一
- 十 齋宮の女御、立后
かくて、后居たまふべきを、齋宮の女御をこそは
三四六
- 十一 源氏太政大臣、大将内大臣に昇進
おとゝ、太政大臣にあがりたまひて
三四八
- 十二 内大臣の家族
腹々に御子ども十余人、おとなびつゝものしたまふ
三四九

十三 夕霧と雲居雁

冠者の君一にて生ひ出でたまひしかど

十四 内大臣と大宮、琴をひきつつ語る

所々の大襲どもも果てて、世の中の御いそぎもなく

十五 夕霧、内大臣と語る

こなたにとて、御几帳隔てて入れたてまつりたまへり

十六 内大臣、夕霧と雲居雁との噂を聞く

おとと出でたまひぬるやうにて、しのびて人に物宣たまふ

十七 内大臣、大宮に恨む

二日ばかりありて参りたまへり、しきりに参りたまふ時

十八 内大臣、乳母と語る

姫君は、何心もなくておはするに、さしのぞきたまへれば

十九 大宮の心中

宮はいといとはしとおほす中にも、男君の御かなしさは優れたまふ

二十 夕霧と雲居雁の悩み

いとと文なども通はむことの難きなめり

二十一 内大臣、雲居雁を引き取る

おととはそのまゝに参りたまはず、宮をいとつらしと思ひ

二十二 雲居雁と大宮と対面

宮の御ふみにて、おととこそ恨みもしたまはめ

二十三 夕霧と雲居雁と対面

冠者の君、物のうしろに入り居て見たまふに

二十四 夕霧、二条の院にこもる

男君は、立ちとまりたるこゝちも、いと人わろく

二十五 五節に惟光の娘を奉る

大殿には今年五節たてまつりたまふ

三三

三三

三六二

三六五

三六九

三七五

三七六

三八二

三八五

三九三

三九七

四〇四

四〇六

- 二十六 夕霧、惟光の娘に歌をおくる 四二
 大学の君胸のみふたがりて、ものなども見入れられず
- 二十七 夕霧、直衣聴許 四二五
 あさぎの心やましければ、うちへ参ることもせず
- 二十八 源氏、筑紫の五節と贈答 四六
 五節のまるる儀式は、いづれともなく、心々になくしたまへる
- 二十九 舞姫の退出 四三
 やがて皆とめさせたまひて、官仕すべき御けしきありけれど
- 三十 夕霧、五節に文を送る 四四
 兄のわらは殿上する、常にこの君にまゐり仕うまつるを
- 三十一 惟光、夕霧の文を見る 四六
 ふたり見る程に、父ぬしと寄り来たり
- 三十二 源氏、夕霧を花散里に託す 四六
 かの人、文をだにえやりたまはず
- 三十三 夕霧、花散里を批判 四九
 はのかになど見たてまつるにも
- 三十四 年の暮れ 四三
 年の暮れには、む月の御さうぞくなど、宮はただ
- 三十五 二条の院の正月 四三
 ついたちにも、大殿は御ありきしなければ
- 三十六 朱雀院へ行幸 四三
 きさらぎの廿日あまり、朱雀院に行幸あり
- 三十七 主上、源氏と太后を訪問 四四
 夜ふけぬれど、かゝるついでに、太后の宮おはします方を
- 三十八 尚侍と太后 四四
 尚侍の君も、のどやかに思し出づるに

三十九 夕霧、進士。秋、侍従

かくて大学の君、その日の文うつくしう作りたまひて

四十 式部卿の宮の五十の賀

大殿、静かなる御住まひを、同じくは広く見所ありて

四十一

六条の院造営

八月にぞ、六条の院造りはてて渡りたまふ

四十二

方々の移転

彼岸の頃はひ渡りたまふ、一度にと定めさせたまひしかど

四十三

中宮と紫の上と応酬

この町々の中の隔てには、辨ども廊などを

四十四

明石の御方の移転

大井の御方は、かう方々の御うつろひ定まりて

四〇

四一

四二

四三

四六

四七

さしえ目次

絵合（中扉）京都御所清涼殿朝餉の間

絵入源氏物語 「内に参りたまひぬ」

巻物 平家納経（厳島神社蔵）

絵入源氏物語 「帥の宮も参りたまへり」

御堂関白記 寛弘八年六月 「草の手に仮名の所々に書きまぜて」

松風（中扉）亀山・兼明親王別荘碑

伴大納言絵詞下巻 「ひけがちにつなし憎き願」

なこそ滝

絵入源氏物語 「あくがれながめ居たり」

大井川

絵入源氏物語 「ふる里に見し世の友を恋ひわびて」

修紫田舎源氏 二十七篇上

立石（平泉毛越寺庭園趾）

隆能源氏絵 竹河 「几帳のはころびから覗く」

阿弥陀三尊（権蔵寺蔵）

絵入源氏物語 「小鳥しるしばかり引き附けさせたる萩の枝など」

紫式部日記絵巻 「しなじなにかづけて」

薄雲（中扉）大井川

冬の大井川

一七	二五	三六	四六	五七	六八	七八	八八	九八	一〇八	一二七	一三七	一四七
----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----

佐竹本歌仙絵 小野小町

隆能源氏絵 鈴虫(一) 尼そぎ 夕霧 文にあまる髪

絵入源氏物語 「御はかし、あまがつやうの物とりて乗る」

御くだもの (春日神社神饌)

絵入源氏物語 「わたどの戸口に待ちかけて」

隆能源氏絵 横笛 「うつくしげなる御ちをくめたまひて」

北野天神縁起第三卷 行幸

絵入源氏物語 「御念誦堂にこもり居たまひて」

釈迦如来像 (清涼寺藏)

朝顔(中扉) 紫式部日記絵巻

絵入源氏物語 「あさがはの花のさかりは過ぎやしぬらむ」

絵入源氏物語 「雪ふる里と荒れし垣根ぞ」

絵入源氏物語 「一年、中宮の御前に雪の山つくられたし」

春日権現験記絵第三卷 「かんざしおもやう」

地藏菩薩像 (淨瑠璃寺藏)

乙女(中扉) 源氏釈

円珍病中言上文案

春日現験記絵第五卷 釣殿

絵入源氏物語 「おとよの御はさらなり」

神泉苑

年中行事絵巻第十卷 「所々の大襲どもも果てて」

信西古楽図 筆をひく

北野天神縁起第二卷 大将参内

二五

二五

二五

二六

二七

二七

一七

一八

二九

二九

二九

二六

二五

二七

二六

二八

二八

二二

三〇

三〇

三三

三三

三三

三二

三三

三六

三六

大殿油	三九九
北野天神縁起第一卷 「殿まかでたまふけはひ」	三九九
石上神宮	四〇四
絵入源氏物語 「したてたるやうだいなどの、あり離う」	四〇七
十五番歌合 小野小町・元輔	四一九
北野天神縁起第一卷 朱雀院の行幸	四三七
年中行事絵巻第十卷 東の舟	四四一
春日権現験記絵第一卷 造営工事	四五二
絵入源氏物語 「秋の前栽をばむら／ほのかにまぜたり」	四六〇
絵入源氏物語 「水のはとりに菖蒲根を繁らせて」	四六一
春日権現験記絵第三卷 渡殿のそり橋	四六六

